校異源氏物語・すま

世中いとわつらはしくはしたなきことのみまされはせめてしらすかほにありへてもこれよりまさることもやとおほしなりぬかのすまはむかしこそ人のすみかなともありけれいまはいとさとはなれ心すこくてあまのいゑたにまれになときゝ給へと人しけくひたゝけたらむすまゐはいとほいなかるへしさりとてみやこをとをさからんもふるさとおほつかなかるへきを人わるくそおほしみたるゝよろつのことゝきしかたゆくすゑおもひつゝけ給にかなしきこといとさま　くなりうきものと思ひすてつる世もいまはとすみはなれなん事をおほすにはいとすてかたきことおほかるなかにもひめ君のあけくれにそへてはおもひなけき給へるさまの心くるしうあはれなるをゆきめくりても又あひみむ事をかならすとおほさむにてたにをを一二日のほとよそ　くにあかしくらすおり　くたにおほつかなきものにおほえ女君も心ほそうのみおもひ給へるをいくとせそのほとゝかきりあるみちにもあらすあふをかきりにへたゝりゆかんもさためなき世にやかてわかるへきかとてにもやといみしうおほへ給へはしのひてもろともにもやとおほしよるおりあれとさる心ほそからんうみつらのなみ風よりほかにたちましる人もなからんにかくらうたき御さまにてひきくし給へらむもいとつきなくわか心にも中　く物おもひのつまなるへきをなとおほしかへすを女君はいみしからむみちにもをくれきこえすたにあらはとおもむけてうらめしけにおほいたりかの花ちるさとにもおはしかよふことこそまれなれ心ほそくあはれなる御ありさまをこの御かけにかくれてものし給へはおほしなけきたるさまもいとことはりなりなをさりにてもほのかにみたてまつりかよひ給し所　く人しれぬ心をくたき給人そおほかりける入道の宮よりもゝのゝきこえや又いかゝとりなさむとわか御ためつゝましけれとしのひつゝ御とふらひつねにありむかしかやうにあひおほしあはれをもみせたまはましかはとうちおもひいて給にもさもさま　くに心をのみつくすへかりける人の御ちきりかなとつらく思きこえ給三月はつかあまりのほとになむみやこをはなれ給ひける人にいつとしもしらせ給はすたゝいとちかうつかうまつりなれたるかきり七八人はかり御ともにていとかすかにいてたちたまふさるへき所　くに御ふみはかりうちしのひ給ひしにもあはれとし

のはるはかりつくい給へるは見所もありぬへかりしかとそのおりの心ちのまきれにはか　くしうもきゝをかすなりにけり二三日かねてよにかくれておほいとのにわたり給へりあんしろくるまのうちやつれたるにて女くるまのやうにてかくろへいり給もいとあはれにゆめとのみゝゆ御方いとさひしけにうちあれたる心ちしてわか君の御めのとゝもむかしさふらひし人のなかにまかてちらぬかきりかくわたり給へるをめつらしかりきこえてまうのほりつとひてみたてまつるにつけてもことにものふかゝらぬわかき人　くさへよのつねなさおもひしられて涙にくれたりわか君はいとうつくしうてされはしりおはしたりひさしきほとにわすれぬこそあはれなれとてひさにするゑたまへる御けしきしのひかたけなりおとゝこなたにわたり給ひてたいめし給へりつれ　くにこもらせ給へらむほとなにと侍らぬむかしものかたりもまいりてきこえさせむとおもふ給へれと身のやまひをもきによりおほやけにもつかうまつらすくらゐをもかへしたてまつりて侍にわたくしさまにはこしのへてなむとものゝきこえひか　くしかるへきをいまは世中はかるへき身にも侍らねといちはやきよのいとおそろしう侍なりかゝる御事をみたまふにつけてぃのちなかきは心うくおもふ給えらるゝよのすゑにも侍かなあめのしたをさかさまになしてもおもふたまへよらさりし御ありさまをみたまふれはよろついとあちきなくなんときこえ給ひていたうしほたれ給とあることもかゝる事もさきのよのむくひにこそ侍なれはいひもてゆけはたゝ身つからのをこたりになむ侍さしてかく官尺をとられすあさはかなることにかゝつらひてたにおほやけのかしこまりなる人のうつしさまにて世中にありふるはとかおもきわさに人のくにゝもし侍なるをとをくはなちつかはすへきさためなとも侍るなるはさまことなるつみにあたるへきにこそ侍るなれにこりなき心にまかせてつれなくすくし侍らむもいとはゝかりおほくこれよりおほきなるはちにのそまぬさきに世をのかれなむとおもふ給へたちぬるなとこまやかにきこえ給むかしの御ものかたり院の御事おほしのたまはせし御心はへなときこえいて給て御なをしのそてもえひきはなちたまはぬに君もえ心つよくもてなし給はすわかきみのなに心なくまきれありきてこれかれになれきこえ給をいみしとおほいたりすき侍にし人を世におもふ給へわするゝよなくのみいまにかなしひ侍をこの御事になむもし侍世ならましかはいかやうにおもひなけき侍らましよくそみしかくてかゝるゆめをみすなりにけると思給なくさめ侍おさなくものし給うかかくよはひすきぬる中にとまり給てなつさひきこえぬ月日やへたゝり給はむと思たまふるをなむよろつのことよりもかなしう侍いにしへの人もまことに

おかしあるにてしもかゝる事にあたらさりけり猶さるへきにて人のみかとにもかゝるたくひおほう侍りけりされといひいつるふしありてこそさることも侍けれとさまかうさまに思給へよらむかたなくなむなとおほくの御ものかたりきこえ給三位中将もまいりあひ給ておほみきなとまいり給ふに夜ふけぬれはとまり給て人　く御まへにさふらはせ給てものかたりなとせさせ給人よりはこよなうしのひおほす中納言の君いへはえにかなしうおもへるさまを人しれすあはれとおほす人みなしつまりぬるにとりわきてかたらひ給これによりとまり給へるなるへしあけぬれは夜ふかういて給ふにありあけの月いとおかし花の木ともやう

　くさかりすきてわつかなるこかけのいとしろきにはにうすくきりわたりたるそこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれにおほくたちまされりすみのかうらむにをしかゝりてとはかりなかめ給中納言の君みたてまつりをくらむとにやつまとをしあけてゐたり又たいめむあらむこととこそおもへはいとかたけれかゝりけるよをしらて心やすくもありぬへかりし月ころさしもいそかてへたてしよなとのたまへはものもきこえすなくわか君の御めのとの宰相の君して宮のおまへより御せうそこききこえ給へり身つからききこえまほしきをかきくらすみたり心ちためらひ侍ほとにいとよふかういてさせ給なるもさまかはりたる心ちのみし侍かな心くるしき人のいきたなきほとはしはしもやすらはせ給はてときこえ給へれはうちなきたまひて

　とりへ山もえしけふりもまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく御返ともなくうちすし給てあか月のわかれはかうのみや心つくしなる思しり給へる人もあらむかしとの給へはいつとなくわかれといふもしこそうたて侍るなるなかにもけさは猶たくひあるましうおもふ給へらるゝほとかなとはなこゑにてけにあさからすおもへりきこえさせまほしきことも返〻おもふたまへなからたゝにむすほゝれ侍ほとをしはからせ給へいきたなき人はみたまへむにつけても中

　くうきよのかれかたうおもふ給へられぬへけれは心つよう思給へなしていそきまかて侍ときこえ給いて給ふほとを人　くのそきてみたてまつるいりかたの月いとあかきにいとゝなまめかしうきよらにてものをおほいたるさまとらおほかみたになきぬへしましていはけなくおはせしほとよりみたてまつりそめてし人　くなれはたとしへなき御ありさまをいみしとおもふまことや御返

　なき人のわかれやいとゝへたゝらむけふりとなりし雲井ならてはとりそへてあはれのみつきせすいて給ひぬるなこりゆゝしきまてなきあへりとのにおはしたれはわか御方の人　くもまとろまさりけるけしきにて所　くにむれゐてあ

さましとのみ世をおもへるけしきなりさふらひにはしたしうつかまつるかきりは御ともにまいるへき心まうけしてわたくしのわかれおしむほとにや人もなしさらぬ人はとふらひまいるもをもきとかめありわつらはしきことまされは所せくつとひしむまくるまのかたもなくさひしきに世はうきものなりけりとおほしらる大はむなともかたへはちりはみてたゝみ所　くひきかへしたりみるほとたにかゝりましていかにあれゆかんとおほすにしのたいにわたり給へれは御かうしもまいらてなかめあかしたまひけれはすのこなとにわかきはらはへところ　くにふしていまそおきさはくとのゐすかたともおかしうているをみたまふにも心ほそうとし月へはかゝる人人もえしもありはてゝやゆきちらむなとさしもあるましきことさへ御めのみとまりけりよへはしか　くして夜ふけにしかはなんれいのおもはすなるさまにやおほしなしつるかくて侍ほとたに御めかれすとおもふをかくよをはなるゝきはには心くるしきことのをのつからおほかりけるひたやこもりにてやはつねなき世に人にもなさけなきものと心をかれはてんといとおしうてなむときこえ給へはかゝるよをみるよりほかにおもはすなることはなに事にかとはかりのたまひていみしとおほしいれたるさま人よりことなるをことはりそかしちゝみこいとおろかにもとよりおほしつきにけるにましてよのきこえをわつらはしかりてをとつれきこえ給はす御とふらひにたにわたり給はぬを人のみるらむこともはつかしく中　くしられたてまつらてやみなましをまゝはゝのきたの方なとのにわかなりしさいはひのあわたゝしさあなゆゝしやおもふ人方　くにつけてわかれ給ふ人かなとのたまひけるをさるたよりありてもりきゝ給ふにもいみしう心うけれはこれよりもたえてをとつれきこえ給はす又たのもしき人もなくけにそあはれなる御ありさまなる猶よにゆるされかたうてとし月をへはいはほのなかにもむかへたてまつらむたゝいまは人きゝのいとつきなかるへきなりおほやけにかしこまりきこゆる人はあきらかなる月日のかけをたにみすやすらかにみをふるまふこともいとつみをもかなりあやまちなけれとさるへきにこそかゝることもあらめと思にましておもふ人くするはれいなきことなるをひたおもむきにものくるをしき世にてたちまさることもありなんなときこえしらせ給日たくるまておほとのこもれり帥宮三位中将なとおはしたりたいめし給はむとて御なをしなとたてまつるくらゐなき人はとてむもんのなをし中　くいとなつかしきをき給てうちやつれ給へるいとめてたし御ひんかき給とてきやうたいにより給へるにおもやせ給へるかけの我なからいとあてにきよらなれはこよなうこそおとろへにけれこのかけのやうにやゝせて侍あはれな

るわさかなとの給へは女君なみたひとめうけてみをこせ給へるいとしのひかたし

身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬかゝみのかけはゝなれしときこえ給へは

わかれてもかけたにとまるものならはかゝみをみてもなくさめてましはしらかくれにゐかくれて涙をまきらはし給へるさま猶こゝらみるなかにたくひなかりけりとおほしゝらるゝ人の御ありさまなりみこはあはれなる御ものかたりきこえ給てくるゝほとにかへり給ひぬはなちるさとの心ほそけにおほしてつねにきこえ給もことはりにてかの人もいまひとたひみすはつらしとやおもはんとおほせはその夜は又いて給ふものからいとものうくていたうふかしておはしたれは女御かくかすまへ給てたちよらせ給へることゝよろこひきこえ給さまかきつゝけむもうるさしいといみしう心ほそき御ありさまたゝ御かけにかくれてすくいたまへるとし月いとゝあれまさらむほとおほしやられてとのゝうちいとかすかなり月おほろにさしいてゝ池ひろく山こふかきわたり心ほそけにみゆるにもすみはなれたらむいはほのなかおほしやらるにしおもてはかうしもわたり給はすやとうちくしておほしけるにあはれそへたる月かけのなまめかしうしめやかなるにうちふるまひ給へるにほひにるものなくていとしのひやかにいり給へはすこしゐさりいてゝやかて月をみておはすまたこゝに御物かたりのほとにあけかたちかうなりにけりみしかよのほとやかはかりのたいめむも又はえしもやとおもふこそことなしにてすくしつるとしころもくやしうきしかたゆくさきのためしになるへき身にてなにとなく心のとまる世なくこそありけれとすきにしかたのことゝもの給ひてとりもしは　くなけは世につゝみていそきいて給れいの月のいりはつるほとよそへられてあはれなり女君のこき御そにうつりてけにぬるゝかほなれは

月かけのやとれるそてはせはくともとめてもみはやあかぬひかりをいみしとおほいたるか心くるしけれはかつはなくさめきこえたまふ

ゆきめくりつゐにすむへき月かけのしはしくもらむそらなゝかめそおもへははかなしやたゝしらぬ涙のみこそ心をくらすものなれなとのたまひてあけくれのほとにいて給ひぬよろつの事ともしたゝめさせ給したしうつかまつり世になひかぬかきりの人　くとのゝ事とりをこなふへきかみしもさためをかせ給ふ御ともにしたひきこゆるかきりは又えりいて給へりかの山さとの御すみかのくはえさらすとりつかひたまふへきものともことさらよそひもなくことそきてさ

るへきふみとも文集なといりたるはこさては琴ひとつそもたせ給ところせき御
てうとはなやかなる御よそひなとさらにくし給はすあやしの山かつめきてもて
なし給さふらふ人　くよりはしめよろつのことみなにしのたいにきこえわたし
給りやうし給みさうみまきよりはしめてさるへき所　く券なとみなたてまつり
をき給ふそれよりほかのみくらまちおさめとのなといふ事まて少納言をはか
　くしきものにみをき給へれはしたしきけいしともくしてしろしめすへきさま
ともの給ひあつくわか御方の中つかさ中将なとやうの人　くつれなき御もてな
しなからみたてまつるほとこそなくさめつれなに事につけてかとおもへとも命
ありてこの世に又かへるやうもあらむをまちつけむとおもはむ人はこなたにさ
ふらへとのたまひてかみしもみなまうのほらせ給わか君の御めのとたち花ちる
さとなともおかしきさまのはさるものにてまめ　くしきすちにおほしよらぬこ
となし内侍のかみの御もとにわりなくしてきこえ給とはせたまはぬもことはり
に思ひ給へなからいまはと世をおもひはつるほとのうさもつらさもたくひなき
ことにこそ侍けれ
　あふせなきなみたの河にしつみしやなかるゝみおのはしめなりけむと思給
いつるのみなむつみのかれかたう侍ける道のほともあやうけれはこまかにはき
こえ給はす女いといみしうおほえ給てしのひ給へと御そてよりあまるもところ
せうなん
　なみたかはうかふみなはもきえぬへしなかれてのちのせをもまたすてなく
くみたれかき給へる御ていとおかしけなりいまひとたひたいめなくてやとお
ほすは猶くちおしけれとおほしかへしてうしとおほしなすゆかりおほうておほ
ろけならすしのひ給へはいとあなかちにもきこえ給はすなりぬあすとてくれに
は院の御はかおかみたてまつり給とてきた山へまうて給あか月かけて月いつる
比なれはまつ入道宮にまうて給ちかきみすのまへにおましまいりて御身つから
きこえさせ給東宮の御事をいみしううしろめたきものに思きこえ給かたみに心
ふかきとちの御ものかたりはよろつあはれまさりけんかしなつかしうめてたき
御けはひのむかしにかはらぬにつらかりし御心はへもかすめきこえさせまほし
けれといまさらにうたてとおほさるへし我御心にもなか　くいまひときはみた
れまさりぬへけれはねむしかへしてたゝかく思ひかけぬつみにあたり侍もおも
ふ給へあはすることのひとふしになむそらもおそろしう侍おしけなき身はなき
になしても宮の御世にたにことなくおはしまさはとのみきこえ給そことはりな
るや宮もみなおほししらるゝことにしあれは御心のみうこきてきこえやり給は

す大将よろつの事かきあつめおほしつゝけてなき給へるけしきいとつきせすなまめきたり御山にまいり侍を御ことつてやときこえ給にとみにものもきこえ給はすはりなくためらひたまふ御けしきなり

みしはなくあるはかなしきよのはてをそむきしかひもなく　くそふるいみしき御心まとひともにおほしあつむる事ともゝえそつゝけさせ給はぬ

わかれしにかなしき事はつきにしをまたそこの世のうさはまされる月まちいてゝいて給ふ御ともにたゝ五六人はかりしも人もむつましきかきりして御むまにてそおはするさらなる事なれとありし世の御ありきにことなりみないとかなしう思なりなかにかのみそきのひかりのみすいしんにてつかうまつりし右近のそうのくら人うへきかうふりもほとすきつるをつゐにみふたけつられつかさもとられてはしたなけれは御ともにまいるうちなりかものしものみやしろをかれとみはたすほとふとおもひいてられておりて御むまのくちをとる

ひきつれてあふひかさしゝそのかみをおもへはつらしかものみつかきといふをけにいかにおもふらむ人よりけにはなやかなりしものをとおほすも心くるし君も御むまよりおり給てみやしろのかたおかみ給神にまかり申し給ふ

うき世をはいまそわかるゝとゝまらむ名をはたゝすの神にまかせてとのたまふさまものめてするわかき人にて身にしみてあはれにめてたしとみたてまつる御やまにまうて給ておはしましゝ御ありさまたゝめのまへのやうにおほしいてらるかきりなきにても世になくなりぬる人そいはむかたなくゝちおしきわさなりけるよろつのことをなく　く申給ひてもそのことはりをあらはにうけ給はりたまはねはさはかりおほしのたまはせしさま　くの御ゆいこんはいつちかきえうせにけんといふかひなし御はかはみちの草しけくなりてわけいり給ほといとゝつゆけきに月もかくれてもりのこたちこふかく心すこしかへりいてんかたもなき心しておかみ給にありし御をもかけさやかにみえ給へるそゝろさむきほとなり

なきかけやいかゝみるらむよそへつゝなかむる月も雲かくれぬるあけはつるほとにかへり給ひて春宮にも御せうそこきこえ給わう命婦を御かはりにてさふらはせ給へはその御つほねにとてけふなんみやこはなれ侍又まいりはへらすなりぬるなんあまたのうれへにまさりておもふ給へられ侍よろつをしはかりてけいしたまへ

いつかまたはるのみやこのはなをみんときうしなへる山かつにしてさくらのちりすきたるえたにつけ給へりかくなむと御らんせさすれはおさなき御心ち

にもまめたちておはします御返いかゝものし給らむとけいすれはしはしみぬた
に恋しきものをとをくはましていかにといへかしとのたまはすものはかなの御
返やとあはれにみたてまつるあしきなきことに御心をくたき給ひしむかしのこ
とおり　くの御ありさま思つゝけらるゝにもものおもひなくて我も人もすくい
たまひつへかりけるよを心とおほしなけきけるをくやしうわか心ひとつにかゝ
らむことのやうにそおほゆる御返はさらにきこえさせやり侍らすおまへにはけ
いし侍ぬ心ほそけにおほしめしたる御けしきもいみしくなむとそこはかとなく
心のみたれけるなるへし

さきてとくちるはうけれとゆく春は花のみやこをたちかへりみよときしあ
らはときこえてなこりもあはれなるものかたりをしつゝひと宮のうちしのひて
なきあへりひとめもみたてまつれる人はかくおほしくつをれぬる御ありさまを
なけきおしみきこえぬ人なしましてつねにまいりなれたりしはしりをよひ給ま
しきおさめみかはやうとまてありかたき御かへりみのしたなりつるをしはしに
てもみたてまつらぬほとやへむとおもひなけきけりおほかたの世の人もたれか
はよろしく思ひきこえんなゝつになり給しこのかみゝかとのおまへによるひる
さふらひ給てそうし給事のならぬはなかりしかはこの御いたはりにかゝらぬ人
なく御とくをよろこはぬやはありしやむことなきかむたちめ弁官なとの中にも
おほかりそれよりしもはかすしらぬを思ひしらぬにはあらねとさしあたりてい
ちはやきよを思はゝかりてまいりよるもなしよゆすりておしみきこえしたにお
ほやけをそしりうらみたてまつれと身をすてゝとふらひまいらむにもなにのか
ひかはとおもふにやかゝるおりは人わろくうらめしき人おほく世中はあちきな
きものかなとのみよろつにつけておほすその日は女君に御ものかたりのとかに
きこえくらし給てれいのよふかくいて給かりの御そなとたひの御よそひいたく
やつし給て月いてにけりなゝをすこしいてゝみたにをくりたまへかしいかにき
こゆへき事おほくつもりにけりとおほえむとすらんひとひふつかたまさかにへ
たゝるおりたにあやしういふせき心ちするものをとてみすまきあけてはしにい
さなひきこえ給へは女君なきしつみたまへるをためらひてゐさりいて給へる月
影にいみしうおかしけにてゐたまへりわか身かくてはかなきよをわかれなはい
かなるさまにさすらへたまはむとうしろめたくかなしけれとおほしいりたるに
いとゝしかるへけれは

いけるよのわかれをしらてちきりつゝ命を人にかきりけるかなはかなしな
とあさはかにきこえなし給へは

おしからぬいのちにかへてめのまへのわかれをしはしとゝめてしかなけにさそおほさるらむといとみすてかたけれとあけはてなはゝしたなかるへきによりいそきいて給ぬ道すからおもかけにつとそひてむねもふたかりなから御ふねにのり給ひぬ日なかきころなれはおひかせさへそひてまたさるの時はかりにかのうらにつき給ぬかりそめのみちにてもかゝるたひをならひ給はぬ心ちに心ほそさもおかしさもめつらかなりおほえとのといひける所はいたうあれて松はかりそしるしなる

からくにゝ名をのこしける人よりもゆくゑしられぬいへゐをやせむなきさによるなみのかつかへるをみ給てうらやましくもとうちすしたまへるさまさるよのふる事なれとめつらしうきゝなされかなしとのみ御ともの人　くおもへりうちかへりみたまへるにこしかたの山はかすみはるかにてまことに三千里のほかの心ちするにかいのしつくもたへかたし

ふるさとをみねのかすみはへたつれとなかむるそらはおなし雲井かつらからぬものなくなむおはすへき所はゆきひらの中納言のもしほたれつゝわひけるいへゐちかきわたりなりけりうみつらはやゝいりてあはれにすこけなる山中なりかきのさまよりはしめてめつらかにみ給かやゝともあしふけるらうめくやなとおかしうしつらひなしたり所につけたる御すまひやうかはりてかゝらぬおりならはおかしうもありなましとむかしの御心のすさひおほしいつちかき所　くのみさうのつかさめしてさるへきことゝもなとよしきよのあそんしたしきけいしにておほせをこなふもあはれなり時のまにいと見所ありてしなさせ給水ふかうやりなしうへきともなとしていまはとしつまり給ふ心ちうつゝならすくにのかみもしたしきとの人なれはしのひて心よせつかうまつるかゝるたひ所ともなう人さはかしけれともはか　くしうものをものたまひあはすへき人しなけれはしらぬくにの心ちしていとむもれいたくいかてとし月をすくさましとおほしやらるやう　くことしつまりゆくになかあめのころになりて京の事もおほしやらるゝにこいしき人おほく女君のおほしたりしさま春宮の御事わか君のなに心もなくまきれたまひしなとをはしめこゝかしこ思ひやりきこえたまふ京へ人いたしたて給ふ二条院へたてまつり給と入道の宮のとはかきもやり給はすくらされ給へり宮には

松しまのあまのとまやもいかならむすまのうら人しほたるゝころいつと侍らぬなかにもきしかたゆくさきかきくらしみきはまさりてなん内侍のかみの御もとにれいの中納言の君のわたくしことのやうにて中なるにつれ　くとすきに

しかたの思給へいてらるゝにつけても

こりすまのうらのみるめのゆかしきをしほやくあまやいかゝおもはんさま

くかきつくし給ことのは思ひやるへし大殿にも宰相のめのとにもつかうまつるへき事なとかきつかはす京にはこの御ふみ所　くにみ給ひつゝ御心みたれたまふ人　くのみおほかり二条院の君はそのまゝにおきもあかり給はすつきせぬさまにおほしこかるれはさふらふ人　くもこしらへわひつゝ心ほそうおもひあへりもてならし給し御てうとゝもひきならし給ひし御ことぬきすて給つる御そのにほひなとにつけてもいまはと世になからむ人のやうにのみおほしたれはかつはゆゝしうて少納言はそうつに御いのりの事なときこゆふたかたにみすほうなとせさせ給かつはおほしなけく御心しつめ給ひて思ひなきよにあらせたてまつり給へと心くるしきまゝにいのり申給たひの御とのゐものなとてうしてたてまつり給かとりの御なをしさしぬきさまかはりたる心ちするもいみしきにさらぬかゝみとのたまひしおもかけのけに身にそひたまへるもかひなしいていり給ひしかたよりゐたまひしまきはしらなとをみたまふにもむねのみふたかりてものをとかう思ひめくらしよにしほしみぬるよはひの人たにありましてなれむつひきこえちゝはゝにもなりておほしたてならはし給へれはこひしう思ひきこえ給へることはりなりひたすら世になくなりなむはいはむかたなくてやう　くわすれくさもおひやすらんきくほとはちかけれといつまてとかきりある御わかれにもあらておほすにつきせすなむ入道宮にも春宮の御事によりおほしなけくさまいとさらなり御すくせのほとをおほすにはいかゝあさくおほされんとしころはたゝものゝきこえなとのつゝましさにすこしなさけあるけしきみせはそれにつけて人のとかめいつる事もこそとのみひとへにおほしゝのひつゝあはれをもおほう御らむしすくしすくしうもてなし給ひしをかはかりうきよの人ことなれとかけてもこのかたにはいひいつることなくてやみぬるはかりの人の御をもむけもあなかちなりし心のひくかたにまかせすかつはめやすくもてかくしつるそかしあはれにこひしうもいかゝおほしいてさらむ御返もすこしこまやかにてこのころはいとゝ

しほたるゝことをやくにてまつしまにとしふるあまもなけきをそつむかむ

の君の御返には

浦にたくあまたにつゝむこひなれはくゆるけふりよゆくかたそなきさらなる事ともはえなむとはかりいさゝかかきて中納言の君のなかにありおほしなけくさまなといみしういひたりあはれと思ひきこえ給ふし　くもあれはうちなか

れ給ひぬひめ君の御ふみはこゝろことにこまかなりし御返なれはあはれなることおほくて

浦人のしほくむそてにくらへみよなみ路へたつるよるのころもをものゝいろしたまへるさまなといときよらなりなにこともらう　くしうものし給ふをおもふさまにていまはこと　くに心あはたゝしうゆきかゝつらふかたもなくしめやかにてあるへきものをとおほすにいみしうくちおしうよるひるおもかけにおほえてたへかたう思ひいてられ給へはなをしのひてやむかへましとおほす又うちかへしなそやかくうき世につみをたにうしなはむとおほせはやかて御さうしんにてあけくれをこなひておはす大とのゝわか君の御事なとあるにもいとかなしけれとをのつからあひみてんたのもしき人　くものし給へはうしろめたうはあらすとおほしなさるゝは中　くこの道のまとはれぬにやあらむまことやさはかしかりしほとのまきれにもらしてけりかの伊勢の宮へも御つかひありけりかれよりもふりはへたつねまいれりあさからぬことゝもかき給へりことのはふてつかひなとは人よりことになまめかしくいたりふかうみえたり猶うつゝとはおもひたまへられぬ御すまゐをうけ給はるもあけぬ夜の心まとひかとなんさりともとし月へたてたまはしとおもひやりきこえさするにもつみふかき身のみこそ又きこえさせむこともはるかなるへけれ

うきめかるいせをのあまを思ひやれもしほたるてふすまのうらにてよろつにおもひたまへみたるゝよのありさまもなをいかになりはつへきにかとおほかり

いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけりものをあはれとおほしけるまゝにうちをき　くかき給へるしろきからのかみ四五まいはかりをまきつゝけてすみつきなとみ所ありあはれに思ひきこえし人をひとふしうしとおもひきこえし心あやまりにかのみやす所も思うしてわかれ給ひにしとおほせはいまにいとおしうかたしけなきものに思ひきこえ給おりからの御ふみいとあはれなれは御つかひさへむつましうて二三日するゑさせ給てかしこのものかたりなとせさせてきこしめすわかやかにけしきあるさふらひの人なりけりかくあはれなる御すまひなれはかやうの人もをのつからものとをからてほのみたてまつる御さまかたちをいみしうめてたしとなみたおとしをりけり御返かき給ことのはおもひやるへしかく世をはなるへき身と思ひたまへましかはおなしくはしたひきこえましものをなとなむつれ　くと心ほそきまゝに

伊勢人の浪のうへこくをふねにもうきめはからてのらましものを

あまかつむなけきのなかにしほたれていつまてすまのうらになかめむきこえさせむ事のいつとも侍らぬこそつきせぬ心地し侍れなとそありけるかやうにいつこにもおほつかなからすきこえかはし給花ちるさともかなしとおほしけるまゝにかきあつめ給へる御心　くみ給ふおかしきもめなれぬ心地していつれもうちみつゝなくさめ給へとものおもひのもよほしくさなめり

あれまさるのきのしのふをなかめつゝしけくも露のかゝる袖かなとあるをけにむくらよりほかのうしろみもなきさまにておはすらんとおほしやりてなかあめについち所　くくつれてなむときゝ給へは京のけいしのもとにおほせつかはしてちかきくに　くのみさうのものなともよをさせてつかうまつるへきよしのたまはすかむの君は人わらへにいみしうおほしくつをるゝをおとゝいとかなしうし給きみにてせちに宮にも内にもそうし給けれはかきりある女御みやす所にもおはせすおほやけさまの宮つかへとおほしなおり又かのにくかりしゆへこそいかめしきこともいてこしかゆるされ給ひてまいり給ふへきにつけても猶心にしみにしかたそあわれにおほえたまける七月になりてまいり給いみしかりし御おもひのなこりなれは人のそしりもしろしめされすれいのうへにつとさふらはせ給てよろつにうらみかつはあはれにちきらせ給御さまかたちもいとなまめかしうきよらなれと思ひいつることのみおほかる心のうちそかたしけなき御あそひのついてにその人のなきこそいとさう　くしけれいかにましてさおもふ人おほからむなに事もひかりなき心ちするかなとのたまはせて院のおほしのたまはせし御心をたかへつるかなつみうらむかしとて涙くませ給にえねむしたまはす世中こそあるにつけてもあちきなきものなりけれとおもひしるまゝにひさしくよにあらむものとなむさらにおもはぬさもなりなむにいかゝおほさるへきちかきほとのわかれにおもひおとされんこそねたけれいける世にとはけによからぬ人のいひをきけむといとなつかしき御さまにてものをまことにあはれとおほしいりてのたまはするにつけてほろ　くとこほれいつれはさりやいつれにおつるにかとのたまはすいまゝてみこたちのなきこそさう　くしけれ東宮を院のゝたまはせしさまにおもへとよからぬ事ともいてくめれは心くるしうなとよを御心のほかにまつりこちなし給人　くのあるにわかき御心のつよき所なきほとにていとおしとおほしたることもおほかりすまにはいとゝ心つくしの秋風にうみはすこしとをけれとゆきひらの中納言のせきふきこゆるといひけんうらなみよる　くはけにいとちかくきこえてまたなくあわれなるものはかゝる所の秋なりけり御前にいと人すくなにてうちやすみわたれるにひとりめをさましてまくら

をそはたてゝよものあらしをきゝ給になみたゝこゝもとにたちくる心ちして涙
おつともおほえぬに枕うくはかりになりにけり琴をすこしかきならし給へるか
我なからいとすこうきこゆれはひきさし給て
　恋わひてなくねにまかふうらなみはおもふかたより風やふくらんとうたひ
給へるに人　くおとろきてめてたうおほゆるにしのはれてあいなうおきゐつゝ
はなをしのひやかにかみわたすけにいかにおもふらむわか身ひとつによりおや
はらからかた時たちはなれかたくほとにつけつゝおもふらむ家をわかれてかく
まとひあへるとおほすにいみしくていとかく思ひしつむさまを心ほそしとおも
ふらむとおほせはひるはなにくれとうちの給まきらはしつれ　くなるまゝにい
ろ　くのかみをつきつゝてならひをしたまひめつらしきさまなるからのあやな
とにさま　くのゑともをかきすさひ給へる屏風のおもてともなといとめてたく
見所あり人　くのかたりきこえしうみやまのありさまをはるかにおほしやりし
を御めにちかくてはけにをよはぬいそのたゝすまひになくかきあつめ給へりこ
のころの上手にすめる千枝つねのりなとをめしてつくりゑつかうまつらせはや
と心もとなかりあへりなつかしうめてたき御さまに世のもの思ひわすれてちか
うなれつかうまつるをうれしきことにて四五人はかりそつとさふらひけるせむ
さいの花色　くさきみたれおもしろきゆふくれにうみゝやらるゝらうにいて給
てたゝすみ給ふさまのゆゝしうきよらなる事所からはましてこの世のものとみ
え給はすしろきあやのなよゝかなるしをんいろなとたてまつりてこまやかなる
御なをしおひしとけなくうちみたれ給へる御さまにて釈迦牟尼仏弟子となのり
てゆるゝかによみ給へるまた世にしらすきこゆおきよりふねとものうたひのゝ
しりてこきゆくなともきこゆほのかにたゝちひさきとりのうかへるとみやらる
ゝも心ほそけなるにかりのつらねてなく声かちのをとにまかへるをうちなかめ
給ひて涙こほるゝをかきはらひたまへる御てつきくろき御すゝにはえ給へるふ
るさとの女こひしき人　く心みなゝくさみにけり
　はつかりはこひしき人のつらなれやたひのそらとふこゑのかなしきとの給
へはよしきよ
　かきつらねむかしのことそおもほゆるかりはそのよの友ならねとも民部大
輔
　こゝろからとこよをすてゝなくかりをくものよそにもおもひけるかなさき
の右近のそう
　とこよいてゝたひのそらなるかりかねもつらにをくれぬほとそなくさむと

もまとはしてはいかに侍らましといふおやのひたちになりてくたりしにもさそはれてまいれるなりけりしたにはおもひくたくへかめれとほこりかにもてなしてつれなきさまにしありく月のいとはなやかにさしいてたるにこよひは十五夜なりけりとおほしいてゝ殿上の御あそひこひしく所　くなかめ給らむかしと思ひやり給ふにつけても月のかほのみまもられ給ふ二千里外故人心とすし給へるれいの涙もとゝめられす入道の宮のきりやへたつるとのたまはせしほといはむかたなく恋しくおり　くの事おもひいて給ふによゝとなかれ給ふよふけ侍ぬときこゆれとなをいり給はす

　みるほとそしはしなくさむめくりあはん月のみやこはゝるかなれともそのようへのいとなつかしうむかしものかたりなとしたまひし御さまの院にゝたてまつり給へりしも恋しく思いてきこえ給ひて恩賜の御衣はいまこゝにありとすしつゝいり給ひぬ御そはまことに身をはなたすかたはらにをき給へり

　うしとのみひとへにものはおもほえてひたりみきにもぬるゝ袖かなそのころ大弐はのほりけるいかめしくるいひろくむすめかちにて所せかりけれはきたのかたはふねにてのほるうらつたひにせうようしつゝくるにほかよりもおもしろきわたりなれは心とまるに大将かくておはすときけはあいなうすいたるわかきむすめたちは舟のうちさへはつかしう心けさうせらるまして五節の君はつなてひきすくるもくちおしきに琴のこゑかせにつきてはるかにきこゆるに所のさま人の御ほとものゝねの心ほそさとりあつめ心あるかきりみなゝきにけりそち御せうそこきこえたりいとはるかなるほとよりまかりのほりてはまついつしかさふらひてみやこの御ものかたりもとこそおもひ給へ侍りつれ思のほかにかくておはしましける御やとをまかりすき侍かたしけなうかなしうも侍かなあひしりて侍人　くさるへきこれかれまてきむかひてあまた侍れは所せさを思ひ給へはゝかり侍ことゝも侍りてえさふらはぬこととさらにまいり侍らむなときこえたりこのちくせむのかみそまいれるこの殿のくら人になしかへりみたまひし人なれはいともかなしいみしとおもへともまたみる人　くのあれはきこえをおもひてしはしもえたちとまらすみやこはなれてのち昔したしかりし人　くあひみる事かたうのみなりにたるにかくわさとたちよりものしたることゝの給ふ御返もさやうになむかみなく　くかへりておはする御ありさまかたるそちよりはしめむかへの人　くまか　くしうなきみちたり五節はとかくしてきこえたり

　ことのねにひきとめらるゝつなてなはたゆたふ心君しるらめやすき　くしさも人なとかめそときこえたりほをゑみてみ給いとはつかしけなり

こゝろありてひきてのつなのたゆたはゝうちすきましやすまのうら浪いさりせむとはおもはさりしはやとありむまやのおさにくしとらする人もありけるをましておちとまりぬへくなむおほえけるみやこには月日すくるまゝにみかとをはしめたてまつりてこひきこゆるおりふしおほかり春宮はましてつねにおほしいてつゝしのひてなき給ふみたてまつる御めのとまして命婦の君はいみしうあはれにみたてまつる入道の宮は春宮の御事をゆゝしうのみおほしゝに大将もかくさすらへたまひぬるをいみしうおほしなけかる御はらからの御こたちむつましうきこえ給ひしかむたちめなとはしめつかたはとふらひきこえ給なとありきあはれなるふみをつくりかはしそれにつけても世中にのみめてられ給へはきさいの宮きこしめしていみしうの給ひけりおほやけのかうしなる人は心にまかせてこの世のあちはひをたにしる事かたうこそあなれおもしろきいへゐして世中をそしりもときてかのしかをむまといひけむ人のひかめるやうについせうするなとあしきことゝもきこえけれはわつらはしとてせうそこきこえ給ふ人なし二条院のひめ君はほとふるまゝにおほしなくさむおりなしひんかしのたいにさふらひし人　くもみなわたりまいりしはしめはなとかさしもあらむとおもひしかとみたてまつりなるゝまゝになつかしうおかしき御ありさままめやかなる御心はへも思ひやりふかうあはれなれはまかてちるもなしなへてならぬきはの人

くにはほのみえなとし給ふそこらの中にすくれたる御心さしもことはりなりけりとみたてまつるかの御すまゐにはひさしくなるまゝにえねむしすくすましうおほえ給へとわか身たにあさましきすくせとおほゆるすまゐにいかてかはうちくしてはつきなからむさまをおもひかへし給ふ所につけてよろつの事さまかはりみ給へしらぬしも人のうへをもみ給ひならはぬ御心地にめさましうかたしけなうみつからおほさる煙のいとちかく時　くたちくるをこれやあまのしほやくならむとおほしわたるはおはしますうしろの山にしはといふものふすふるなりけりめつらかにて

山かつのいほりにたけるしは　くもことゝひこなんこふるさと人冬になりて雪ふりあれたるころそらのけしきもことにすこくなかめ給て琴をひきすさひ給ひてよしきよにうたうたはせ大輔よこふえふきてあそひ給心とゝめてあはれなるてなとひきたまへるにこともゝこゑともはやめてなみたをのこひあへりむかし胡のくにゝつかはしけむ女をおほしやりてましていかなりけんこの世にわか思きこゆる人なとをさやうにはなちやりたらむことなとおもふもあらむことのやうにゆゆしうて霜のゝちの夢とすし給ふ月いとあかうさしいりてはかな

きたひのおまし所おくまてくまなしゆかのうへに夜ふかきそらもみゆいりかたの月かけすこくみゆるにたゝこれにしにゆくなりとひとりこちたまて

いつかたの雲路に我もまよひなむ月のみるらむこともはつかしとひとりこち給てれいのまとろまれぬあか月のそらに千とりいとあはれになく

ともちとりもろこゑになくあか月はひとりねさめのとこもたのもし又おきたる人もなけれは返ゝひとりこちてふし給へりよふかく御てうつまいり御ねんすなとし給ふもめつらしき事のやうにめてたうのみおほえ給へはえみたてまつりすてす家にあからさまにもえいてさりけりあかしのうらはたゝはひわたるほとなれはよしきよの朝臣かの入道のむすめを思ひいてゝふみなとやりけれと返事もせすちゝ入道そきこゆへき事なむあからさまにたいめんもかなといひけれとうけひかさらむものゆへゆきかゝりてむなしくかへらむうしろてもおこなるへしとくむしいたうていかす世にしらす心たかくおもへるにくにの内はかみのゆかりのみこそはかしこき事にすめれとひかめる心はさらにさもおもはてとし月をへけるにこの君かくておはすときゝてはゝきみにかたらふやうきりつほの更衣の御はらの源氏のひかる君こそおほやけの御かしこまりにてすまのうらにものし給なれあこの御すくせにておほえぬことのあるなりいかてかゝるついてにこの君にをたてまつらむといふはゝあなかたはや京の人のかたるをきけはやむことなき御めともいとおほくもち給ひてそのあまりしのひ　くみかとの御めさへあやまち給ひてかくもさはかれ給ふなる人はまさにかくあやしき山かつを心とゝめ給てむやといふはらたちてえしりたまはしおもふ心ことなりさる心をし給へついてしてこゝにもおはしまさせむと心をやりていふもかたくなしくみゆまはゆきまてしつらひかしつきけりはゝ君なとかめてたくとももものゝはしめにつみにあたりてなかされておはしたらむ人をしも思ひかけむさてもこゝろをとゝめ給ふへくはこそあらめたはふれにてもあるましきことなりといふをいといたくつふやくつみにあたる事はもろこしにもわかみかとにもかく世にすくれなに事も人にことになりぬる人のかならすある事なりいかにものし給君そこはゝみやす所はをのかをちにものし給ひし按察大納言のむすめなりいとかうさくなるなをとりてみやつかへにいたしたまへりしにこくわうすくれてときめかし給事ならひなかりけるほとに人のそねみをもくてうせ給にしかと此君のとまり給へるいとめてたしかし女は心たかくつかふへきものなりをのれかゝるゐ中人なりとておほしすてしなといひゐたりこのむすめすくれたるかたちならねとなつかしうあてはかに心はせあるさまなとそけにやむことなき人におとるましか

りける身のありさまをくちおしきものにおもひしりてたかき人は我をなにのかすにもおほさしほとにつけたる世をはさらにみしいのちなかくておもふ人　く
にをくれなはあまにもなりなむうみのそこにも入なむなとそ思ひけるちゝきみ
ところせくおもひかしつきてとしにふたゝひすみよしにまうてさせけり神の御
しるしをそひとしれすたのみおもひけるすまにはとしかへりて日なかくつれ
　くなるにうへしわか木のさくらほのかにさきそめて空のけしきうらゝかなる
によろつの事おほしいてられてうちなき給ふおりおほかり二月廿日あまりいに
しとし京をわかれし時心くるしかりし人　くの御ありさまなといと恋しく南殿
のさくらさかりになりぬらんひとゝせの花の宴に院の御けしきうちのうへのい
ときよらになまめいてわかつくれるくをすし給ひしもおもひいてきこえ給
　　いつとなく大宮人のこひしきにさくらかさしゝけふもきにけりいとつれ
　くなるに大殿の三位中将はいまは宰相になりて人からのいとよけれは時世の
おほえをもくてものし給へと世中あはれにあちきなくものゝおりことに恋しく
おほえ給へはことのきこえありてつみにあたるともいかゝはせむとおほしなし
てにはかにまうて給ふうちみるよりめつらしうゝれしきにもひとつなみたそこ
ほれけるすまひ給へるさまいはむかたなくからめいたり所のさまゑにかきたら
むやうなるに竹あめるかきしわたしていしのはし松のはしらおろそかなるもの
からめつらかにおかし山かつめきてゆるしいろのきかちなるにあをにひのかり
きぬさしぬきうちやつれてことさらにゐなかひもてなし給へるしもいみしうみ
るにゑまれてきよらなりとりつかひたまへるてうともかりそめにしなしておま
し所もあらはにみいれらるこすくろくはむてうとたきのくなとゐ中わさにしな
してねんすのくをこなひつとめ給けりとみえたりものまいれるなとことさら所
につけゝうありてしなしたりあまともあさりしてかいつもものもてまいれるをめ
しいてゝ御らむすうらにとしふるさまなとゝはせ給にさま　くやすけなきみの
うれへを申すそこはかとなくさえつるも心のゆくゑはおなしことなにかことな
るとあはれにみ給ふ御そともなとかつけさせ給ふをいけるかひありとおもへり
御むまともちかうたてゝみやりなるくらかなにそなるいねとりいてゝかふなと
めつらしうみ給ふあすかひすこしうたひてつきころの御ものかたりなきみわら
ひみわか君のなにともよをおほさてものし給かなしさをおとゝのあけくれにつ
けておほしなけくなとかたり給にたへかたくおほしたりつきすへくもあらねは
なか　くかたはしもえまねはすよもすからまとろますふみつくりあかし給さい
ひなからもものきこえをつゝみていそきかへり給いと中　くなり御かはらけ

まいりてゑいのかなしひ涙そゝく春のさかつきのうちともろこゑにすし給御と
もの人も涙をなかすをのかしゝはつかなるわかれおしむへかめりあさほらけの
そらに雁つれてわたるあるしのきみ
　ふるさとをいつれのはるかゆきてみんうらやましきはかへるかりかね宰相
さらに立いてん心ちせて
　あかなくにかりのとこよをたちわかれ花のみやこにみちやまとはむさるへ
きみやこのつとなとよしあるさまにてありあるしの君かくかたしけなき御をく
りにとてくろこまたてまつり給ゆゝしうおほされぬへけれと風にあたりてはい
はへぬへけれはなむと申給ふ世にありかたけなる御むまのさまなりかたみにし
のひ給へとていみしきふえの名ありけるなとはかり人とかめつへき事はかたみ
にえしたまはす日やう　くさしあかりてこゝろあはたゝしけれはかへりみのみ
しつゝいて給をみをくり給ふけしきいとなか　くなりいつ又たいめむはと申給
にあるし
　雲ちかくとひかふたつもそらにみよ我はゝる日のくもりなき身そかつはた
のまれなからかくなりぬる人むかしのかしこき人たにはか　くしう世に又まし
らふ事かたく侍けれはなにかみやこのさかひを又みんとなむ思侍らぬなとの給
ふ宰相
　たつかなき雲井にひとりねをそなくつはさならへしともを恋つゝかたしけ
なくなれきこえ侍ていとしもとくやしう思給へらるゝおりおほくなとしめやか
にもあらてかへり給ひぬるなこりいとゝかなしうなかめくらし給やよひのつい
たちにいてきたるみの日けふなむかくおほすことある人はみそきしたまふへき
となまさかしき人のきこゆれはうみつらもゆかしうていて給いとおろそかにせ
しやう許をひきめくらしてこのくにゝかよひける陰陽師めしてはらへせさせ給
ふふねにこと　くしき人形のせてなかすをみ給ふによそへられて
　しらさりしおほうみのはらになかれきてひとかたにやはものはかなしきと
てゐ給へる御さまさるはれにいてゝいふよしなくみえ給ふうみのおもてうら
くとなきわたりてゆくゑもしらぬにこしかたゆくさきおほしつゝけられて
　やをよろつ神もあはれとおもふらむをかせるつみのそれとなけれはとの給
にははかに風ふきいてゝそらもかきくれぬ御はらへもしはてすたちさはきたり
ひちかさあめとかふりきていとあはたゝしけれはみなかへり給はむとするにか
さもとりあへすさる心もなきによろつふきちらし又なき風なりなみいといかめ
しうたちて人　くのあしをそらなりうみのおもてはふすまをはりたらむやうに

ひかりみちて神なりひらめくおちかゝる心ちしてからうしてたとりきてかゝるめはみすもあるかな風なとはふくもけしきつきてこそあれあさましうめつらかなりとまとふに猶やますなりみちてあめのあしあたる所とおりぬへくはらめきおつかくてよはつきぬるにやと心ほそく思まとふに君はのとやかに経うちすしておはすくれぬれは神すこしなりやみて風そよるもふくおほくたてつる願のちからなるへしいましはしかくあらはなみにひかれていりぬへかりけりたかしほといふものになむとりあへす人そこなはるゝとはきけといとかゝる事はまたしらすといひあへりあか月かたみなうちやすみたりきみもいさゝかねいり給へれはそのさまともみえぬ人きてなと宮よりめしあるにはまいり給はぬとてたとりありくとみるにおとろきてさはうみのなかの竜王のいといたうもののめてするものにてみいれたるなりけりとおほすにいともものむつかしうこのすまゐたへかたくおほしなりぬ